

四行の歌に風になびく  
富士の煙の空にきえて  
行えも知らぬ我おもひ  
かな  
相思草、煙草の一名

夢なまさんばく、猿は  
夢なむといふより夢  
なまさんばくらうと  
かゝりたり

佛神すいは、水波と書く  
佛は神の本地にて、神は  
佛の垂跡なれば神と佛  
は水と波のごとくと  
なり  
さしも草、只たのめしめ  
トが原のさしも草我世  
の中にあらんかぎりは  
これ觀音の御歌也草の  
はすはな草の葉よりは  
すはな世とかいれりは  
すはな情トだらくなど  
の意なり  
足まてが觀音巡りなり  
胸の火に平野屋とかけ  
たり、春を重れしは馴染  
重れしなまかせたりひ  
ちのやひな男ひとへな  
るは皆自然と頭韻をあ  
はせたるごとくこれ葉  
林子の得意のとこるな

下風、ひやくと、右の袖口左りの袖へ、とほる  
煙管にくゆる火も、道のなぐさみあつからず、吹  
て亂るゝ薄けふり、空に消えてはこれもまた、ゆ  
くえもしらぬ、相思草、人しのぶ草道草に、日も  
かたぶきぬいそがんと、又立ち出る雲のあし、時  
雨の松の下寺町に、信心ふかきしんかう寺、さと  
らぬ身さへ大覺寺。さて金胎寺、大蓮寺。めぐり  
くはて是ぞはや、三十番にみつ寺の大慈大悲を頼  
にて、かくる佛の御手の糸、しらが町とよ、黒髪は  
戀に亂るゝ忘執の、夢をさまさんばくろうの、こ  
ゝも稻荷の神やしる、佛神すいはのしるじとて夢

ならべし新御靈に。拜みをさまるさしも草、草の  
はすはな世にまじり、卅三に御身をかへ、色で道  
引、情でをしへ、戀を菩提の橋となし、わたし  
救ふ觀世音誓は妙に三重有りがたし  
立まよふ。浮名をよそに、もらさじとつゝむ心の  
うちほん町。焦るゝ胸のひらの屋にはるを重ねし  
ひな男、一つなる口桃の酒、柳の髪もとくゝと、  
よばれて粹の名取川、今は手代とむもれ木の、き  
醤油の袖したゝるき、戀の奴に荷はせて、得意を  
廻りいく玉のチャクリやしるに、こそは着にけれ。  
出茶屋の床より、女の聲、ありや徳さまではない

とくく、柳の髪をとく  
よりうけ徳兵衛の名の  
細々とよばるゝをいふ  
埋れ木のき盤油とうけ  
たり  
とくぬ難波みやげに日  
くあきなひ旦那とく  
ひといふこと京大阪の  
常語なれども遠き田舎  
には知らぬことなり先  
年奥州方の學者此文句  
を不審し解しかれたり  
云々とあり今は世上一  
般知れ渡りたる詞なり  
こや、紺屋なりお初天  
神記の方にてはこんや  
といけり

戻つて見れば、戻つて二  
人の体を見ればなり、駕  
もは駕界く者なり

聞たうも云々、私が便り  
有様を聞たくはなしか  
となり

かいの、コレ徳さまくと手をなげば。徳びゆ  
う系、合點して打うなづき、コレ長藏おれは後よ  
り往のほどに、そちは寺町の久本寺様長久寺様上  
町から屋敷方廻つてさうしてうちへいにや、徳び  
やう系も早戻ると云や、それ忘れずとも阿づち町  
のこや系よつて錢とりやや、道頓堀へよりやん  
なやと、影見ゆるまで見送りく、簾をあけて。  
コレお初ぢやないか、これはどうぢやと編笠を、  
ぬがんとすれば、ア、先矢張きて居さんせ、今日  
は田舎の客で、三十三番の観音様をめぐりまし、  
此で晩まで日ぐらしに、酒にするぢやと贅いひて、

物真似聞にそれそこへ、戻つて見ればむづかしい、  
駕も皆知んした衆、やつぱり笠を見て居さんせ、  
それは左様ぢやが此頃はなしもつぶてもうたんせ  
ぬ、氣遣なれどうちかたの首尾を知らねば便宜も  
ならず、丹波屋まではお百度ほど尋ぬれど、あそ  
こへもおとづれもないとある、ハア誰やらが、ナ  
、それよ、座頭の大市がともだち衆に聞けば、在  
所へいかんしたといへどもつんと誠にならず、ほ  
んに又餘りな私はどうならうとも、聞たうもない  
かいの、こなさま夫ですもぞいの、私は病になる  
わいの、うそならこれ此つかへを見さんせと、手

やみらみつちや、菊石面  
といふことを強くいふ  
にやみらとかぶせ目鼻  
も分らぬ事にいふ、心の  
中は暗といふをかけた  
るなり、革袋、これもわけ  
も道理もなくドカても  
かまはぬ事にいふ、入文  
字屋物などに何のへチ  
マの革袋など多くあり  
夫程にない事をさへ、の  
下「わしにはつゝますい

を取てふところの、うち恨みたるくどき泣、ほん  
の、めをとにかはらじな。男も泣て、オ、道理々々  
々左りながら、云ふて苦にさせ何せふぞいの、此  
中おれが憂苦勞、益と正月其上に、十夜御稜煤掃  
を一度にするとも斯うは有るまい、心の中はむし  
やくしやと、やみらみつちやの革袋、銀ごとやら  
何ぢややらわけは京へも上つて来る、ようもく  
徳びやうゑが命は續きの狂言に、したらばあはれ  
にあらうぞと、溜息ほつとつぐばかり。ハテ輕口  
の段かいの、夫程にない事をさへ、わしにはなぜ  
に云んせぬ、かくさんしたは譯がある、なぜ打明

はんすに「の一句あるべ  
し」お初天神記に「わし  
り」わしにはなせ云々は  
誤りなるべし

すみよつた、此一篇世話  
物のは「まり」といはれ  
しごとく文句すべて寫  
實なり  
いちぶしじう一部始終  
にて物の本の一部を始  
より終まで聞くことよ  
り出し、固なり  
も「ひらな」符牒かび  
た一文などいふと同し  
商ひの勘定に間違なし  
となり  
裕なせふ、裕を新調せん  
とてなり  
加賀は加賀組の畧なり

てはくだんせぬと、膝にもたれてさめくと涙は  
のべを、ひたしけり。ハアテ泣やんを恨みやるな  
隠すではなけれども云ても埒のあかぬこと、さり  
ながら大かた先すみよつたが、一伍一什を聞てた  
も、己が旦那は主ながら現在の伯父甥なればねん  
ごるにもあづかる、又身共も奉公にこれほど油  
断せず、商なひ物ももじひらなか違へたことであ  
らばこそ、此ごろ裕をせふと思ひ、塚筋で加賀一疋  
旦那の名だいで買がゝるこれが一期にたつた一度  
此銀もすはといへば着替賣ても損かけぬ、此正直  
を見て取て、内儀の姪に二貫目付てめをとにし、

商ひさせふといふ談合去年からの事なれど、そなたといふ人もちて、なんの心がうつらふぞ、取あへもせぬ其うち在所の母は繼母なるが、われにかくして親方と談合きはめ二貫目の、銀を握つて歸られしを、此うつそりが夢にも知らず、あとの月からもやくり出し、押て祝言させふと有る、そこでをれもむつとして、やあら聞えぬ旦那殿、わたくし合點致さぬを老母をたらしたいきつけ、あんまりな成されやうお内儀様も聞えませぬ、今まで様に様を付けあがまへた娘御に、銀を付て申しうけ一生女房の機嫌とり此徳びやうゑが立ものか、

此うつそり、徳兵衛自ら  
おのれをいふ

あがまへた娘御たつと  
みしといふこと

かねをたてとは拂ふと  
同し金をそこに出せと  
いふことなり立金など  
いふもそこへ出すべき  
金のことなり  
男の我云々、金を立よと  
いはれよりさらば金を  
返しませふと在所へ取  
に行きしなり  
上つて見ても前に京へ  
いのぼつていくとある

いやと云からは死んだ親父が生かへり、申すとあつても、いやでござると詞を過す返答に、親方も立腹せられ、おれが夫も知て居る、蜷川の天満屋の初めとやらと腐り合、鼻が姪を嫌ふよな、よい、此上は最う娘はやらぬ、やらぬからは銀を立、四月七日までにきつと立、商ひの勘定せよ、まくり出して大阪の地は踏ませぬと怒らるゝ、某も男の我、チ、ソレ畏まつたと在所へ走る、また此母といふ人が此世が彼世へかへつても、握つた銀を放さばこそ、京の五條の醤油問屋つね、銀の取りすれば、これを頼に上つて見ても折しもわるふ

は此金才笈のことなり  
一在所の云々、一在所の  
者總掛りにて母へ話し  
て金をうげとること

銀もなし、引かへして在所へ行き一在所の詫言に  
て、母より銀を受取りたり、をつつけ返し勘定しま  
ひさらりと埒の明くはあく、されども大ざかに置  
かれまい、時にはどうして逢れふぞ、たとへば骨  
をくだかれて、身はしやれ貝の岨川底の水屑とな  
らばなれ、我身にはなれどうせふと、むせび、入  
てぞ泣居たる。お初も、共にせく涙、力を付けて  
押止め、儲々いかい御苦勞皆私ゆゑと存ずれば、  
嬉しかなしうかたじけなし、左りながら心たしか  
に思召せ、大ざかをせかれさんしても、盗みかや  
きの身ではなし、どうしてなりとも置く分は私か

左様したためし、義理に  
せまり懸にこがれて心  
中する例多しとなり

云させり、云さして云得  
ぬなり

どうと、「お初天神籠」に同  
事と字を入れたり

心にある事なり、逢ふにあはれぬ其時は此世ばか  
りの約束か、左様したためしのないではなし、死  
ぬるを高の死出の山三途の川はせく人も、せかる  
る人もあるまいと。氣強う勇む詞の中、涙にむせ  
て云させり。お初重ねて、七日といふてもあすの  
こと、逆も渡す銀なれば早く戻して親方様の機  
嫌をも取らんせといへば。オ、左様思ふて氣がせ  
くが、そなたも知た彼の油屋の九平次が、あとの  
月の晦日たつた一日入る事あり、三日の朝は返さ  
うと一命かけて頼むにより、七日までは入らぬ銀  
兄弟同事の友達のためと思ひて、時貸に貸したる

びんぎ便宜にて假りせ  
ずなり

はつせも遊し云々より  
春の夕ぐれ来て見れば  
まて露曲三井寺の文句  
なり  
ふてきせんばん不出來  
千萬の別本にはふてき  
とあり不敵千萬かこれ  
ら一字の清濁俄に決し  
がたし

が三日四日にびんぎせず、昨日はるすて逢もせず  
今朝尋ふと思ひしが、明日ぎりに商ひの勘定も仕  
舞はんと得意廻りて打過たり、晩に行て埒あけふ  
あいつも男みかくやつ、おれが難義も知て居る、  
如在は有まい氣遣しやるな。ヤアお初。はつせも  
遠し難波寺、名所多き鐘の音。つきぬや法の聲な  
らん、山寺の春の夕暮来て見れば。先なは。コレ  
九平次、ア、ふてきせんばんな、身共方へは不届  
して遊山どころでは有まいぞサア、今日埒あけふ  
と手を取て、引とむれば。九平次興さめ顔になつ  
て、何の事ぞ徳兵衛、此つれ衆は町の衆、上しほ

かたれども、親しく話し  
付合へどもなり

身が云々、別本おれが此  
度の火なんぎ云々

町へ伊勢講にて只今かへるが酒も少し飲て居る、  
利腕取てどうする事ぞ、庵相をするなと笠を取れ  
ば、イヤ此徳兵衛は庵相はせぬ、あとの月の廿八  
日銀子三貫目時がしに、此の三日切に貸たる銀  
夫をかやせといふ事と。いはせも果ず九平次、か  
つらくと笑ひ、氣が違ふたか徳兵衛、我と數年  
かたれども一錢かつた覺えもなし、聊爾な事を云  
かけ後悔するなと振放せば。連も笠をはらりとぬ  
ぐ。徳兵衛はつと色を變へ、いふなく九平次、  
身が此度大難義どうもならぬ銀なれども、晦日た  
つた一日で身代立ぬと歎いたゆゑ、日頃かたるは

判をせよ別本をの字な

方々に張紙此頃は落し  
物拾ひ物とも賭方に張  
紙して人に知らせしな

こゝらと思ひ男づくでかしたぞよ、手形も入らぬ  
といふたれば念の爲ぢや判をせふと、身共に證文  
かゝせおぬしがおした判が有る、さういふな九平  
次と血涙になつて責かくる。ム、ウなんぢや判と  
はどれ見たい、オ、見せいでおかりかと、懐中の  
鼻紙入より取出し。お町衆なら見知もあらう、コ  
リヤ是でもあらがふかと、開いて見すれば。九平  
次横手を打ち、成程判はおれが判、エ、徳兵衛土  
にくひつき死ぬるとてもこんな事はせぬものぢや、  
此九平次はあとの月の廿五日、鼻紙袋を落して印  
判ともにくしなふた、方々に張紙して尋ねれども

けんにも権典といひか

知れぬゆゑ、此月からコソ、此御町衆へもことわ  
り印判をかへたはやい、廿五日に落した判を八日  
に捺されふか、儲はそちが拾ふて手形を書て判を  
すへ、おれにねだつて銀とらふとは謀判より大罪  
人、こんな事をせふよりも盗をせい徳兵衛、エ、  
首を切らせる奴なれど念頃がひにゆるしておく、  
銀になるならして見よと、手形を顔へ打つけ、は  
つたと睨む顔付はけんによも、なげにしらくし。  
徳兵衛くわつと胸せいで大聲揚げ、儲巧んだり巧  
たり、一杯喰ふたか無念やな、ハテ何とせふ此銀  
をのめくと只おのれとられふか、斯う巧んだ事

てんど、出る所へ出るといふことか又はたゞ人中の事をいふかお初天の生玉のでんとにてとありされば往來中との窓か  
あやらかな、洒落くさいなどいふかつゞめ云ふなるべし或は近松の遊脚か

なればてんどへ出てもおれがまけ、腕さきで取て見せふコシマイ平野屋の徳兵衛ぢや男ぢやが合點か、おのれがやうに友達を騙つてたをす男ぢやない、サア來いと、つかみつく。ヤアしやらなてつち上りめ、投てくれんと胸倉とり。ぶち合ねち合たときあふ。お初ははたして飛て下り、あれ皆様たのみます、私が知たれ人ぢやが、駕の衆は居やらぬか、あれ徳様ぢやと身をもがく、詮方もなくあはれなり。客はもとより田舎者、怪我があつてはならぬぞと、無駄に駕に押し入るゝ。イヤ先待てくだんせ、なふかなしやと泣聲ばかり。急げ急

いづれもの手前、喧嘩と聞てより集まりし見物人または其町内の者に對していふことなり

げと、二さんに駕を早めて歸りけり。徳兵衛はただ一人。九平次は五人づれ、あたりの茶屋より棒づくめ、蓮池まで逐ひ出し、誰が踏むやらたゞくやら、さらにわかちはなかりけり。髪もほどかれ帯も解け、あなたこなたへふし轉び、ヤレ九平次め、畜生め、おのれ生ておこうかと、よろほひ尋ね廻れども逃てゆくえも見えはこそ、其まゝそこにとどうどすはり、大聲あげて涙をながし、いづれもの手まへも面目なし耻し、全くこの徳兵衛云かけしたるで更になし、日頃兄弟どうぜんに語りし奴が事といひ、一生の恩と歎きしゆゑ、明日七



役にたぢかれの必死を  
救ふ役にたぢしなり

三百九十二  
日此銀がなければ我等も死なねばならぬ、命がは  
りのかねなれども、互の事と役にたち、手形をわ  
れらが手で書せ、印判すへて其判を前かたに落せ  
しと、町内へ披露してかへつて今の逆ねだれ、口  
惜や無念やな、此ごとく踏たゝかれ男も立ず身も  
立ず、エ、最前に搦み付、喰付てなりとも死なん  
ものをと、大地をたゝき齒がみをなし、拳を握り  
歎きしは、道理とも笑止とも、おもひ、やられて  
あはれなり。ハア斯ういふても無益のこと、この  
徳びやうゑが正直の心の底の清しさは三日をすご  
さず大さか中へ申譯はして見せふと、後に知らる

る詞の端、いづれも御苦勞かけました、御免あれ  
と一禮述べ、やぶれし編笠ひろひきて顔もかたふ  
く日かげさへ、曇る涙にかきくれ、すご  
歸る有様は目もあて、られぬ三重  
戀風の身にしゝみ川、流れてはそのうつせ貝うつ  
となき、色の闇路を照らせとて、夜毎に點す燈火  
は、四季の螢よ雨夜の星か、夏も花見る梅田橋、  
旅のひな人、地の思ひ人、心小テクリ心のわけの  
道、知るもまよへばしらぬも通ひ、新色里と賑は  
し。むさんやな天満屋の、お初はうちへ歸りても  
今日の事のみ氣にかゝり、酒も飲まれず氣もすま

泣より外の事ぞなき、お  
初天神記の方にては此  
へ伯父久右衛門の來た  
る事にせり

ず、しくく、泣て居るところへ。隣のよねや朋  
輩のちよつと來てはなふ初さま、何も聞かんせぬ  
か、徳様は何やら譯の悪い事ありて、たんとおた  
れさんしたと、聞たがほんかといふもあり。イヤ  
私が客さまの話ぢやが。ふまれて死なんしたげな  
といふもあり。かたりを云て縛られての。偽判し  
て括られてのと、ろくな事は一も云ず、問ふにつ  
らさの見舞なり。ア、いや最う云てくだんすな、  
聞けばきく程胸いたみわしから先へ死にそうな、  
いつそ死んでのけたいと、泣より外の事ぞなき、  
涙片手に、おもてを見ればよるの編笠、徳びやう

おうへ、座敷の事なり、様  
子聞かんとおうへのま  
んなかなどよくある事  
なり

ゑ。思ひわびたる忍び姿。チラと見るより飛立ば  
かり、走り出んと思へども、おうへには亭主夫婦  
上り口に料理人、庭では下女がやくたいの、目が  
しげければ左もならず、ア、いかり氣がつきた、  
門見てこふと、そつと出。なふ是はどうぞいの、  
こな様の評判いろくに聞たゆゑ、其氣遣さ氣遣  
さ、氣違ひのやうになつて居たわいのふと、笠の  
うちに顔さし入れ、聲を立ずのかくし泣、あはれ  
せつなき涙なり。男も涙にくれながら、聞きやる  
通りの巧みなれば云ふ程おれが非に落る、其うち  
四方八方の首尾はぐわらりと違ふてくる、最早今

三百九十六  
宵は過されず、とんと覺悟を極めたと、さゝやけ  
ば。内よりも、世間に悪い取沙汰ある初さま内へ  
はいらんせと、聲々に呼いる。チキキあれぢ  
や何も話されぬ、私がするやうにならんせと、襦  
の裾にかくし入れ、チキキはふく。中戸の履脱よ  
り、忍ばせて、掾の下やにそつといれ、上り口に  
腰打掛け、煙草引よせ、吸つけて素知らぬ、顔し  
て居たりけり。かゝる所へ九平次は、悪口仲間二  
三人、座頭まじくらどつと來たり。やあよね様達  
さびしさうにごさる、何と客になつてやらうかい、  
なんと亭主久しいのと、のさばり上れば、それ煙

しなすがひ、死なぬが仕  
合せといふことか或は  
脾弱といふことか  
まつかいさま、眞替さま  
にて替さまとは反對に  
かほることないふ、芝居  
事などにまつつなにて  
物などいふは此の眞替  
さまな似せ物なり即ち  
眞替へなにて眞赤とか  
くは誤りなり  
野邊か飛田もの、御仕置  
になりさらし物になる

草盆お杯とありべかゝりに立さはぐ。イヤ酒はお  
きや飲て來た、儲話す事がある、これの初が一客  
平野屋の徳兵衛めが、身が落した印判ひろい、二  
貫目の贗手形で騙らふとしたれども、理窟につま  
つてあげくには、しなすがひな目にあふて一分は  
捨つた、向後こゝらへ來たるとも油斷しやるな、  
皆に斯う語るのも徳兵衛めがうせまつかいさまに  
いふとても、必らず誠にしやるなや、寄せる事も  
入らぬもの、どうて野邊か飛田ものど、誠しやか  
に云散らす。掾の下には齒をくひしはり身をふる  
はして腹を立つるを。初はこれを知らせじと足の

べしとなり飛田は刑場  
なり  
久しい客のこと、徳兵衛  
なます

利根に云ぬもの、左様利  
口そうにいほぬものな  
り

身のひし、身の挫ぎとな  
りしといふ事か

劉山人曰く徳兵衛様の  
下に忍び居お初の足に

先にて押しづめ、をさへしづめし神妙さ。亭主は  
久しい客のこと、よしあしの返答なく、さらば何  
ぞお吸物と、まぎらかしてぞ立にける。初は涙に  
くれながら、左のみ利根に云ぬもの、徳様の御事  
幾年なじみ心根をあかしあかせし中なるが、それ  
は、いとしほげに微塵譯は悪ふなし、頼もした  
てが身のひして、だまされさんしたものなれども、  
證據なければ理も立ず。此上は徳様も死なねばな  
らぬしなるが、死ぬる覺悟か聞たいと、獨言に  
なぞらへて、足で問へば。打うなづき、足首取て  
咽喉まで、自害するとぞ知らせける。キ、其咎々

てのどをなづる所妙な  
り可断勝

どうずり、胴摺を或はス  
りといふべきか今一段  
強くどうをつけて云ふ  
ならんか、どう畜生、どう  
盲目などの類なり

々、いつまで生ても同じこと、死んで耻をすゝが  
いではといへば。九平次、ぎよつとして、お初は  
何を云るゝぞ、なんの徳兵衛が死ぬるものぞ、も  
し又死んだら其あとは、おれが念頃してやらう、  
そなたもおれに惚てぢやげなといへば。こりや忝  
けなかるわいの、私と念頃さあんすところなとも殺  
すが合點か、徳様にはなれて片時も生て居やうか、  
そこな九平次のどうずりめ、あほう口をたゝいて  
人が聞てもふしんが立、どうで徳様一所に死ぬる、  
わしも一所に死なるぞやいのと、足にてつけば。  
様の下には涙を流し、足を取て押いたたき、膝に

火も仕舞へ、今火を落す  
といふに同ト

だきつきこがれ泣、女も色に包みかね、互に物は  
云ねども、膽と膽とにこたへつゝ、しめり、泣に  
ぞ泣居たる、人しらぬこそあはれなれ。九平次も  
氣味悪く、相場が悪いおじやいの、此なよね衆は  
異な事で、おれがやうに銀遣ふ大盡は嫌ひそうな  
あさ屋へ寄て一杯してぐわらく、一分を撒き散し、  
そしていんだら寐よからうア、懷中が重たうて、  
歩きにくいと悪口だらけ云散らし、わめいてこそ  
は歸りけれ。亭主夫婦、こよひははや火もしまへ、  
とまりの衆は寐せませい、初も二階へ上つて寐や、  
早う寐やと云ければ、そんなら旦那様内儀様、最

見世をあげ看板おるす

こひぢのやみ、別木の  
字なし

うお目に掛りますまいさらばでござんす、内衆も  
さらばくとよそながら、暇乞してねやに入る、  
これ一生の別とは後にこそ知れ氣もつかぬ、おろ  
かの心ふびんさよ。ソレ釜の下に念を入れ魚を鼠  
にひかするなと、見せをあげつ門さしつ、寐るよ  
り早く高軒、テクッリいかなる、夢もみじかよの、八  
つになるのは程もなし。初は白無垢死出立、戀路  
のやみをくる小袖、上に襦さし足し、二階の口よ  
りさし覗けば、男は下屋に顔出し、まねきうなづ  
き指さして、心に物をいはすれば、階子の下に下  
女寐たり、釣行燈の火はあかし、いかゞはせんと

玉かづら、織るを苦しき  
にかけたり

あんせしが、棕櫚箒に扇をつけ、箱はしごの二つ  
目より、あふぎ消せども消かぬる、身も手ものば  
しはたとけせば、階子よりどうどおち、行燈消え  
てくらがりに。下女はうんと寐がへりし。二人は  
胸を震はして、尋ねまはる、危ふさよ。亭主奥に  
て目をさまし、今のは何ぢや、女子共ありあけの  
燈もきえた、起てとほせとおこされて。下女は眠  
そに目をすりく、丸裸にて起出、火打箱が見え  
ぬと、さぐりありくを。さはらじと、あなたこな  
たへはひまつはる、玉かづら、くるしき闇のうつ  
なや、やうく二人手を取合、門口までそつと

石の火、電光石火の比喩  
なとれり

劉山人の「俗耳被吹」に此  
道行の文をあげ、徂徠先

出、かきがねははづせしが、車戸の音いぶかしく  
明かねし折から。下女は火打をはたくと。打音  
にまぎらかし、ちやうどうてばそつとあけ、かち  
く打ばそろくあけ、あはせくして身をちぢめ  
袖とくをまきの戸や、虎の尾を踏む心地して、  
二人ついでつツと出、顔を見合せ、嬉しと、  
死に行く身をよろこびし。あはれさつらさあさま  
しさ。あとに火打の石の火のいのちの末こそ三重  
短けれ

曾根崎心中 徳兵衛道行

此世の名残。夜もなごり。死に行く身をたとふれ

曾根崎心中

生日近松が妙處此中にあり外はこれにて推量るべしと宇佐美恵助の語とありまことにこゝは妙文にて後の心中物の道行の文句の範圍をいづるもの少なしあだしが原あだし野とも云て辨地をいふ此段つれづれ草のあだしの露消ゆる時なく鳥部の山の烟立さらてのみ云々の一節におもむき同

心なき云々此一節秘積以貫が評あれば末に別に出す  
今年の中云々世に偏屈なる者の近松の此の心中物いて世に心中者多くなり京傳の洒落本出て勘當帳につく息子ふえたりといへど既

ば、あだしが原の道の霜、一足づゝに消ゑて行く、夢のゆめこそあはれなれ。あれかぞふればあかつきの七つの時が六つなりて残る一つが今生の、鐘の響の聞をさめ、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も、空もなごりと見上れば、雲心なき水の音、北斗はさえて影うつる星の妹脊の天の河、梅田の橋を鵲のはしと契りていつまでも。われとそなたは夫婦星。必らずさうとすがりより、二人が中に降る涙、河の水嵩もまさるべし、向ふの二階は、何屋とも、おぼつかなさけ最中にて、まだ寝ぬ火影聲高く、今年の心中よしあしの、言の葉

草や茂るらん。聞くに心もくれはどり、あやなや昨日今日までも、よそに云しが明日よりは、我も噂の数に入り、世にうたはれん唄は唄へ、唄ふを聞けば、唄うて女房にやもちやさんすまい、いらぬものぢやと思へども、實に思へども欺けども、身も世も思ふまゝならず、いつを今日とて今日が日まで、心の伸しよはもなく、思はぬ色に苦しみに、唄うしたことの縁ぢややら忘るゝ間はないわいな、夫に振捨行かうとは、やりやしませぬぞ手にかけて殺しておいてゆかんせな、放ちはやらじと泣ければ、唄も多きに彼唄を時こそあれ今宵し

も、唄ふは誰そや聞くは我、過にし人も我々も、  
 一つおもひと縋りつき、聲も惜まず泣居たり。い  
 つはさもあれ此よは、せめてしばしは長からで、  
 心もなつの夜のならひ、命をはゆる鶏の聲、あけ  
 なばうしや天神の森で死なんと手を引いてヲシリ  
 うめだ、ツみの小夜鳥、あすは我身を餌食ぞや。  
 まことにことしはこなさまも廿五さいの厄の年、  
 わしも十九の厄年とて、思ひあふたる厄祟り、縁  
 の深さのしるしかや、神や佛にかけおきし現世の  
 願を今こゝで、未來へ回向し後の世も、なほしも  
 一つ蓮ぞやと、つまぐる珠數の百八に涙の玉の數

かしこにか云々此かし  
 こと死場所を見たて草  
 の露を打拂へばなりは  
 らへどお初天神記には  
 らへばとありばの方よ  
 ろし  
 附要か此ところ如講亦  
 如電の經文をとるか

そひて、つきせぬあはれつきるみち、心も空もか  
 げくらく、風しんくたる會根崎の森にぞ、たど  
 りつきにける  
 かしこにか、こゝにかと拂へど、草に散る露の、  
 我より先にまづ消えて、さだめなき世は稻妻か、  
 それか、あらぬか。ア、こは、今のは何といふも  
 のやらん。オ、あれこそは人玉よ、今宵死するは  
 我のみとこそ思ひしに、先だつ人も有しよな、誰  
 にもせよ死出の山のともなひぞや、なむあみだ佛  
 南無阿彌陀佛の聲のうち、あはれ悲しや又こそ魂  
 の世をさりしは、なむあみだ佛と云ければ、女は



結び松、棕櫚の相生會根  
崎天神の森に必らずあ  
りしものなるべし  
露のうき身の、宗因の「白  
露や無分別なる置所」の  
句をあや取るに似たり

おろかに涙ぐみ、今宵は人の死ぬる夜かや、あさ  
ましさと涙ぐむ。男涙をはらくと流し。二つ  
つれとぶ人玉をよその上と思ふかや、まさしう御  
身と我魂よ。なになふ二人のたましゐとや、はや  
我々は死したる身か。オ、常ならば結びとめ繋ぎ  
とめんと歎かまし、今は最期を急ぐ身の、魂のあ  
りかを一つにすまん、道をまよふなたがふなと、  
いだきよせはだをよせ、かつばと伏て、泣居たる、  
二人の心ぞ不便なる、涙の糸の結び松、しゆるの  
一木のあひおひを、連理のちぎりになぞらへ、露  
のうき身の置所。サア此にきはめんと、上着の帯

利が、お初天神記には初  
はとあり  
われく、もし別れく、  
かと別木お初天神記等  
見合せしがみなわれく  
なり即ち破れくにて  
別れく、と意味は同ト

を徳兵衛も初も涙の染小袖、ぬいでかけたるしゆ  
ろの葉のチャリその玉、ほゞき、今ぞ實に、浮世  
の塵を、拂ふらん。初が袖より剃刀出し、もしも  
道にて追手のかゝり、われくになるとても、浮  
名は捨じと心がけ剃刀用意致せしが、望の通り一  
所で死ぬるこの嬉しさと云ければ、オ、神妙たの  
もし、左程に心落つくからは最期も案ずる事は  
なし左りながら、今は時の苦患にて死姿見苦し  
と云れんも口惜し、此ふたもとの連理の木にか  
らだをきつと結び付、いさぎよう死ぬまいか世に  
類なき死様の手本とならん。いかにもと、淺猿や

あさぎ染、かゝれとてやは抱へ帶兩方へ引張て、  
剃刀とつてさらくと。帯はさけてもぬし様とわ  
しが間はよもさけじと、どうど座を組み二重三重  
ゆるがぬやりにしつかとしめ。よう締ったか。ナ  
、しめましたと、女は夫の姿を見。男は女の體を  
見て、こは情なき身の果ぞやと、わつと泣いて、  
ばかりなり。ア、なげかじと徳兵衛、顔ふり上げ  
手を合せ、我幼少にて誠の父母にはなれ、伯父と  
いひ親方の苦勞となりて人となり、恩もおくらず  
此まゝに、なき跡までも兎や角と御難義かけん勿  
躰なや、罪を免して下されかし、冥途にまします

父母には追付お目にかゝるべし、迎へ玉へと泣け  
れば。お初も同じく手をあはせ、こなさまは羨ま  
しや、冥途の親御に逢はんとある、われらがと、  
さまかゝさまはまめで此世の人なれば、いつ逢ふ  
ことの有べきぞ、便は此春聞たれども、あふたは  
去年の初秋の、初が心中取沙汰の、明日は在所へ  
聞へなば、いかばかりかは歎きをかけん、親達へ  
も兄弟へもこれから此世の暇乞、せめて心が通じ  
なば夢にも見えてくれよかし、なつかしの母さま  
や、名残をしの父さまと、しやくりあげく、聲も  
惜まず泣ければ。夫もわつと叫び入り、流涕こが

る、心いき、ことはりせめてあはれなれ。いつま  
 て云て詮もなし、はやく殺してくと最期を急  
 げば。心得たりと、脇差するりと拔放し、サア只  
 今ぞなむあみだくと、いへどもさすが此年月い  
 としかわいとしめでねし、肌はだに刃やいばがあてられふか  
 と、眼まなこもくらみ手てもふるひ、よわる心こころを引ひなほし  
 取直もとしても尙なほふるひ、突つとはすれど切先きりさきはあなた  
 へはづれこなたへそれ、二三度にひらめく劔けんの刃やいば。  
 あつとばかりに咽喉のどに、くつととほるが。なむあ  
 みだ、なむあみだ、南無阿彌陀佛なむあみだぶつと、くりとほし  
 くりとほす腕うでさきも、よわるを見れば両手りょうてをのべ、

斷未たぎ斃ぎの四苦八苦しよこはつこ、チクリあはれと、いふもあまり  
 あり。我われとてもをくれふか息いきは一度いちどに引取ひきとらんと、  
 剃刀かみばさみ取とて咽のどに突立つきたて、つかもをれよ刃やいばも折ひけとゑぐ  
 り、くりくり目めもくるめき、苦しむ息いきもあかつき  
 の、血死ちじ期きにつれて絶果たぎたり。誰たれが告つるとはそね  
 ざきの森もりの下風音かぜのこゑに聞きえ、取とつたへ、貴賤きせん群集ぐんじゆの  
 回向かいきやうの種たね、未來みらい成佛ぶつうたがひなき戀こひの、手本てほんとな  
 りにけり。

此作は元禄十六年五月にて心中ありて其時直ちに作りしと見え  
 たり文中に四月七日までに金を立よ増を明よとありて六日の夜  
 より曉かけての心中なり、竹本座にて折しも、日本王代記の  
 興行中に切淨るりとして五月七日に出したり、事ありしより一

月あきてのこと見事なる心中と評判高うちゆゑ特に人氣に投じたるものか、増補外題年鑑に是世上世話淨るりの始めにして竹本氏古今の大あたりなりとあり、道行のところは替古淨るりにもはやり所謂人口に喰炙してか其文句を後の淨るり又は浮世双紙に取りしこと多し、近松生前に其作にして二度竹本座の勾欄に上りしもの丹波與作と國性爺合戦と此の曾根崎心中のみされば三傑作とはこの三種をいふべし、二度目は享保二年八月、豊竹座にては享保十八年、(菓林子没後)これを、初天神記と名題を改め増補加作して出したなり、(お初徳兵衛ありしよりして曾根崎天神のことを人皆お初天神と呼びしゆゑ斯く外題をかへしにて本文かはるところは身或ひは身共とあるをわれとせしぐらゐの事にてテニテハ二三少所に過す、左れど作意は大に増補し本文には陰にしてある伯父を平野屋久右衛門としてこれがお初の許を尋ねて徳兵衛の身の上を頼み、また九平次を取違せて

徳兵衛の恨を報ふ件を入れ、心中のところの終りを左の如く改めたり

我とてもおくれふか夫婦一違托生と目を閉ぢ唱名するところ  
に、あまたの提灯星の如く、天満屋夫婦、久右衛門、念佛の  
聲に駢集り、ヤア徳兵衛ぢやと、聞よりもすてに自害と見え  
けるを、左右に縋つて押しとむる。イヤノウお初に退付く命  
ころしてたべと身をあせる。久右衛門聲を上げ、ヤレ待て呉  
れ徳兵衛、お初は最早息絶たり、しなしたりさりながら、九  
平次が印形のたくみ、お上へ露顯の上からはお初が最期にお  
よびしも、開扉け玉ふべし、まづ立降れと引立ゆく、死なぬ  
取沙汰死んださた、初が最期場此やしろ、誰がいふとなく口  
ずさみ、云傳へ聞つたへ、名を曾根崎の松かけに末の世まで  
もといめたり

これは心中ありし時より三十年ほど後の事なり原作に始末をつ

けぬ悪人の九平次を辛き目にあはして捕へさせ却つて徳兵衛を生かしたるは人意を快くする爲か、久右衛門の出も箱込物らしからずよく作りたり、左れど原作は初をシテとし徳兵衛をワキとしたりやま、人形辰松八郎兵衛もつとも名譽ありし故なるべけれど徳兵衛悪人の巧の爲に恨を吞て共に死し終るかた憐深く餘韻ありといふべし

此作道行の文句につき俗耳鼓吹には俳書摩訶十夜を引いて曰く曾根崎心中の道行の中に何々として何とやら死に行く身をたふればあだしが原の道の霜一足づゝに消えて行くといふところまで作りしが、言葉盡て心たらず、いかにかいと案じほけたるところ、其頃伊勢の涼菫、攝に來合れけるを悦び、此あといかいして續けんや、御助言し玉へと投げかけたり、菫更聞ながら外の話して酒のみ物くひて笑ひ遊び、門左衛門ひたすらにすゝめたのめるにぞ、菫更何やかや雑談しながら、夢の夢こそはか

なければ成ともやり玉へと云しに、近松大に悦び、やがて作り入しとなり、まことに詞情の盡たらんにいとよく轉じたる文體すらくとして其あとのいかようにも取續けやすき彼の決前生後の文法なりとあり、涼菫と巢林子の交はりのこと他には見ねど時代はあへり涼菫の捷才巢林子の文字を愛重するともに美談とすべきなり

難波土産 (穂積以貫著) に曰く、三づゝ十と三つの里、大阪十三所の観音のある所三十三所ゆえ三づゝ十と三つといふこの文句が雅にして面白し、近松が手段にあらずばかく優美には云がたがるべし、是は伊勢物語の歌に鳥の子を十づゝ十はかさぬともといへる詞がらをかりて書たりしかも、大阪を三津の里といふに云かなへて三づゝ十と三津の里と詞を引うつしたるところ妙なり、大阪を三津の里といふは高津、敷津、難波津の三ある故なり

雲こゝろなき水の面北斗はさるて云々、此文句陶淵明が歸去來の辭に雲無心にして岫を出づといふ語あり其外詩人の詞に雲の心なきを人情のなき思ひの胸にふさがる目より見てうらやむ心多しことも其心にて書なせり、我々はうき思ひにかきくれしにうらやましや雲は心もなく何の苦もなく見ゆるとなりそれより水の面とらつりて蜷川のけしきをいひしも彼の空は一つに雲の波といへる心持に書なし空の景氣と今目前の川邊のけしきとを混して上と下とて云たる甚だめづらかなり、空の北斗は心よくさへ其影水にうつりてかがやくも我胸のくもりたるには事かはりてうらやまれわきてうらやましき事は七夕の星のいもせのちぎりをこめ玉ふ天の河もありありとさぞな二星は千歳をかけてつきぬ契りを結ぶらんさらば我々もあやかりて今わたる梅田の橋をかささぎの橋とちぎり必らずそはんとすがりよる有様その景借ふる補より云かけ川のみかさとうつりたるも筆のあゆみ心

よくおもしろしその情その態いづれもさる有るべし (中略)

又長町女腹切のうちぢ花半七道行の文句中いよしどげんとかいたるはほだしの種か花すいさ云々は江戸半太夫節の文と

とばを悉皆取り入れしなり、文ことばの文はまことに文は園の友いよし御げんと書たるはほだしの種か花すいさほんに誓文いとしさにいくよの夢を結び文かたさま

るる梅よりとちもひまらせそらくとわけの盃色めいてわきていつみのおもわくは只あひまして、またのをにしをま

つかしくとあり半太夫節は元祿ころ盛りに江戸に行はれしものにて京阪にもあよぼせり此文ことばは寶永七年版の松の落葉に出た

れど元祿十六年版の松の葉に吾妻淨瑠璃として半太夫節をあまた出したれば近松門左衛門の盛より先に世に盛に行はれしものなることは疑ひなし左れば元祿十三年作の長町女腹切にも其文

句を取られしなるべし。是によりおもへば他にも古淨るり及び  
 吾妻淨るりの文段を取入れられしこと多かるべし。倍此文中の  
 よいごげんといふことごげんは御見にて御見參をつめて云しこ  
 と論なけれどいよしは愈々のくがしと誤りなれしかまたは彌  
 しといふがいよしとなりしか或はいにしにて過し逢瀬をいふな  
 らんかゆふしにて昨夜のことならんなど説々多し。いにしなれ  
 ば過去となり彌しなれば未來のこと意味いたく違へり。これは  
 全く彌しにていやすく御見參を重ねてといふ意と愈々御  
 目もこのうへ文にかきあまるおもひを申しのべんとの意なるべ  
 し左ればこそいよく御げんの節とかいたるがほだしとなりて  
 又の逢瀬がまたるとはいふなるべし。近き頃まで遊女がとは  
 せ文にはいよく御げんもじの上といふことば必ずありしと  
 聞く。寶曆四年竹田出雲三好松洛等合作の「小袖組貫練門平」  
 のうち道行戀の物狂ひ中に「歸る乙鳥渡る雁翅にかけし玉章に

いよしごげんはいつくと文には世のものに關云々」とわれ  
 ばいよしは未來へかゝる彌しまたは愈々のいよしなること決し  
 たり。出雲松洛の徒かく耳なれ聞なれ用ひなれたる語にいかで  
 過去未來をわやまつべき。此事些々たる事ながら古くなりては  
 いよく解しがたきをおもふて巻尾に一言す

明治三十五年六月二十日印刷  
明治三十五年六月廿三日發行

其林子撰註  
定價金壹圓

著者 饗庭與三郎

東京市本所區向島小梅町百〇七番地

發行者 高田早苗

東京市小石川區關口町二百番地

印刷者 佐久間衡治

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目三番地

發行所 東京專門學校出版部

東京府豐多摩郡戶塚村大字下月塚六百四十七番地

印刷所 秀英舎第一工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目三番地

不許複製



東京專門學校出版部出版圖書目錄

早稻田叢書

(版八) 米國アリンストン大學政治科教授  
文學博士ワッドロオ、ワイルソン原著  
法學博士 高田 早苗 譯

政治汎論

一名沿革實用政治學  
背皮金文字入上製 正價壹圓五拾錢  
一千二百五十頁 小包料四百文

經濟原論

(版一十) 英國ケンブリッヂ大學教授  
法學博士 アルフランド、マインヤル原著  
法學博士 井上 辰九郎 譯

背皮金文字入上製 正價壹圓貳拾錢  
八百頁 郵稅拾八錢

國民銀行論

(版四) 英國 ウォルフ原著  
法學博士 天野爲之助  
柏原文太郎 譯

新條約論

(版三) 國際法 專攻  
法學博士 中村進午著

經濟政策

(版三) 英國 シナウキック原著  
文學博士 土子金四郎 譯  
法學博士 田島 錦治 譯

經濟學研究法

(版三) 英國 シ、エー、キー、エンス原著  
法學博士 天野爲之助 譯

近時外交史

(版五) 國際法學會員 有賀長雄著  
法學博士

英國國會史

(版三) 英國 ビー、シー、スコット原著  
法學博士 高田 早苗 譯

發賣元 博文館

東京市日本橋區本町三丁目

發賣所 有斐閣書房

東京市神田區一ツ橋通町

同 東京 京堂

東京市神田區麩糠保町

同 吉岡書店

大阪市東區備後町四丁目



佛國巴黎大學ルイ、ルノール原著  
法學博士 有賀 長雄序  
總編輯 宮本 川九郎  
新編

國際法論

正價金拾五錢 郵税金四錢

法學士 田 一著

支那貿易

正價四拾錢 郵税金四錢

橫山 正修 編著

非鐵道國有論

正價金貳拾五錢 郵税金四錢

ドクトル、オウ、高木正統編著  
フイロソフイ

トラス

正價金壹拾錢 郵税金四錢

(版三)

米國シカゴ大學政治科教授  
ハリー、プラット、ジャックソン 原著  
東京專門學校 大内 暢 三郎 譯

歐洲十九世紀史

正價金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢

總クロス上製四百餘頁鮮明地圖挿入  
マチエラ、オウ、ロース 松平康國編著

世界近世史

正價金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢

總クロス上製紙數四百餘頁  
鮮明地圖挿入

長田 忠一 編著

佛蘭西史

正價金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢

總クロス上製紙數四百餘頁  
鮮明地圖挿入

小山 松壽 著

南清貿易

正價金五拾五錢 郵税金六錢

各國勢力範圍 支那交通 産業圖挿入  
英國アーナルド、アール、コリンソン 原著  
法學士 立 作 太郎 抄譯

伯母 大隈 重信 講演

最近之支那

正價 金三拾五錢 郵税 金四錢

鮮明地圖挿入

管公談

正價 金壹拾錢 郵税 金四錢

網島 榮一 郎 著

快樂派倫理

正價 金五拾五錢 郵税 金六錢

法學博士 高田 早苗 抄譯

帝國主義論

正價 金四拾錢 郵税 金六錢

近刊

浮田 和民 編 史

希 田 和民 編 史

羅 田 和民 編 史

松平 康國 編 史

英 國 史

文藝士 坂本 健一 編 史

伊 太 利 史

文藝士 坂本 健一 編 史

西 班牙 荷 牙 史

荷 蘭 白 耳 義 史

文藝士 高島 駒吉 編 史

北 歐 史

長田 忠一 編 史

土 耳 古 波 留 汗 史

法學士 三木 猪太郎 抄譯

犯罪學

正價 金四十錢 郵税 六錢

ワイルド、ヒル、ホサン、ケイ 原著  
浮田 和民 編譯

國家哲學

正價 金四十錢 郵税 六錢

法學博士 高田 早苗 抄譯  
山本 利喜雄 編著

歷史叢書

正價 金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢

總クロス上製四百五十頁鮮明地圖挿入  
マチエラ、オウ、ロース 松平康國編著

露西亞史

正價 金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢

總クロス上製四百五十頁鮮明地圖挿入

英國憲法史

正價 金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢

總クロス上製四百五十頁鮮明地圖挿入

小 崎 弘 道 編 史

長 崎 風 輔 編 史

中 央 亞 細 亞 史

文藝士 高島 駒吉 編 史

印 度 史

文藝士 矢野 仁一 編 史

清 國 史

文藝士 河合 弘良 編 史

近 世 殖 民 史

文學叢書

文藝博士 坪内 雄藏 著

英文學史

總クロス上製英本九百餘頁  
正價 金貳圓 小色紙四行外

五

東京專門學校出版部圖書目錄

高安月郊譯

イブセン社會劇

總クローズ上製 四百餘頁  
正價金壹圓 郵稅拾四錢

豐庭 筑村著

巢林子撰註

刊近

文惠博士 坪内雄藏著

英詩文評釋

刊近

東京專門學校講師增田泰之助著

英詩文評釋

刊近

宮崎三味選

元祿名著集

刊近

近刊

宮崎三味譯  
支那史  
小説史

トルストイ伯著 尾崎紅葉 譯  
アンナ、カレニナ

フライタツカ著 登原信一郎譯  
ソルウノド、ハアベン

フロウベル著 上田敏譯  
マダム、ボブリー

ハーティイ著 梅澤精一譯  
テ

ホーソン著 内田真譯  
スカール、レタ

尾崎紅葉著  
俳諧七部集略解

赤岡又次郎著  
有職故實

六

ストツグアード著 千葉健造譯  
英國小説進化論

ドウアン著 中島俊一譯  
シェークスピア

早稲園文學會編選  
諸曲評釋

島村龍太郎譯  
名家短篇集

森島南著  
元曲舉隅

經濟學叢書

伊國法學博士レイギー、ヨツサ原著  
日本法學士 永井直好重譯

社會經濟原論

總クローズ上製 三頁餘頁  
正價金壹圓 郵稅拾四錢

册一个

東京專門學校出版部圖書目錄

英國タアヴェニ、エー、シヨウ著  
日本 信夫淳平譯

歐洲貨幣史

刊近

米國エドワード、カロール原著  
法學博士 天野爲之助  
伊藤 藤 正 譯

金融之原理及其實際

刊近

近刊

法學博士和田重謙三郎 岸田虎三郎  
コンラード氏經濟學  
(上)國民經濟學 (中)經濟政策學  
(下)財政學

法學博士松崎廣之助 岩城之憲  
ハドレー氏經濟學

文學士梅若誠太郎 地原正典共譯  
アダムス氏財政學

法學博士天野爲之助 原田駒之助譯  
クレアー氏外國爲替論

法學士 永井直好譯  
ハッテン氏消費論

奧文 聰譯  
スミス氏經濟統計學

法學士 柳田國男譯  
クラーク氏分配論

文學士 杉江輔人譯  
クレーン氏交通機關論

マスマー、オウ、フィン干葉譯  
埃國價值論

譯者未定  
ボン、バワーク氏資本論

譯者未定  
デヴィッドソン氏貨幣論



法律叢書

法學博士鳩山和夫 法學博士權藤陳重  
法學博士岡村文彦 法學博士戸水寛人 批

帝國大學教授レーンホルム  
法學博士梅隆次郎 法學博士菊池武夫 評

法學博士中村進午 法學博士吉川五郎合譯  
法學博士瀧田忠三郎 山口武一

獨逸民法論

册四全

附獨逸民法正文正價金八圓  
滿列三千五百餘頁背皮金字入上製

第一卷 總則 第二卷 物權  
第三卷 債權 第四卷 親族、相續

●正價 〇圓一圓七角五分 〇郵稅金拾七錢五分  
●郵費 〇圓一圓一角五分 〇郵稅金拾七錢五分  
●郵費 〇圓一圓一角五分 〇郵稅金拾七錢五分  
●郵費 〇圓一圓一角五分 〇郵稅金拾七錢五分

七

法學博士梅山和夫 梅澤次郎批評  
獨逸博士ワイルヘルム、エンテマン原著  
大學教授  
法學士堀内秀太郎 法學士古川五郎合  
法學士堀内秀太郎 中村健一郎合

獨逸商法論

冊二全

紙數千二百餘頁背皮金字字入上製美本  
正價金壹圓五拾錢小包幣四百文

附獨逸商法正文

獨逸博士リット原著  
法學博士岡田朝太郎  
法學博士乾政彦共譯  
法學士菅孫子勝

獨逸刑法論

刊近

近刊

獨逸ハフテル著 法學士堀口九万二譯  
國際公法  
獨逸パール著 法學士古川五郎譯  
國際私法  
佛國フイオナー著 法學士宮本平九郎譯  
國際私法

法學士青山榮司著

商行為

冊一全

正價 金七拾五錢 郵稅 金八錢

教科書類及雜書

學海 依田百川序  
省軒 龜谷行引  
晚香 菊池三九郎編

文章真訣

冊一全

正價 金七拾五錢 郵稅十錢  
複製則百篇法則則百篇時代則百篇

金卓庵序 土屋鳳洲序  
三島中洲序 菊池晚香編

漢文綱要

冊一全

正價 金六拾錢 郵稅 金六錢

獨逸博士レマン著  
法學士古川五郎  
法學士里見三作  
法學士堀内秀太郎  
法學士小島溫法學士鈴木喜三郎共著

民法要論

論

法學士 青山榮司著  
商法要論  
法學士 朝倉外茂著  
海商法

法學士 小島 溫著

法律教科書

法學士 小島 溫著

民法總則

冊一全

正價 金四拾錢 郵稅 金四錢

判事 今村信行著

民事訴訟法

冊一第

正價 金四拾錢 郵稅 金四錢

赤城文次郎 千秋季隆共編

網要 平家物語

冊一全

正價 金六拾五錢 並製金五拾錢  
郵稅金六錢

東京專門校附藤之助編

英語文章軌範

冊一全

總クローヌ原裝本 紙數二百頁  
正價 金五十錢 郵稅四錢

法學博士 岡田朝太郎贊評  
判事 藤澤藤十郎著

改正 刑法評論

冊一全

正價 金五十錢 郵稅金六錢

法學士古川五郎 山口弘一合編

獨逸新商法正文

冊一全

正價 金壹圓 郵稅 金拾四錢

法學士 平沼誠一郎著

債權法總則

冊一全

正價 金六拾錢 郵稅 金六錢

法學士 牧野菊之助著

親族法

冊一全

正價 金四拾五錢 郵稅金六錢

法學士 和仁貞吉著

保險法

冊一全

正價 金四拾錢 郵稅 金四錢

法學士 青山榮司著

商法總則

冊一全

正價 金六拾錢 郵稅 金六錢

法學士 鈴木喜三郎著

物權法

冊一全

正價 金五拾五錢 郵稅金六錢

附照 新法典正文

冊二全

民法之部 ●法例●民法●民  
法施行法●人事訴訟  
法●外三法全一冊 正價四十五錢  
郵稅八錢

商法之部

●國籍法●商法●商  
法施行法●供託法全一冊  
正價廿八錢 郵稅六錢

法典修正案理由書

冊二全

●民法●法例●國籍法  
●不動產登記法●民法施行法  
●商法●商法施行法 壹冊  
正價 金七十五錢 郵稅一冊十四錢

刑法修正案參考書

冊一全

近刊

一九一九年

八〇

東京專門學校出版部出版圖書目錄

論議大正調查綿密世界智識集本誌の一特色

# 早稻田學報

每月一回二十日發行

大賣場	早稻田	海外	文藝	政法	經濟	雜纂	講演	論說	定價
本郷	芝	神田	神田	芝	神田	芝	神田	神田	金一圓六角
盛春堂	福島屋	東京堂	有斐閣	芝	神田	芝	神田	神田	郵金一圓六角
									郵金一圓六角
									郵金一圓六角

早稻田學會

東京市牛込區早稻田東京專門學校出版部

國際法學會法學博士 賀賀長雄氏主筆

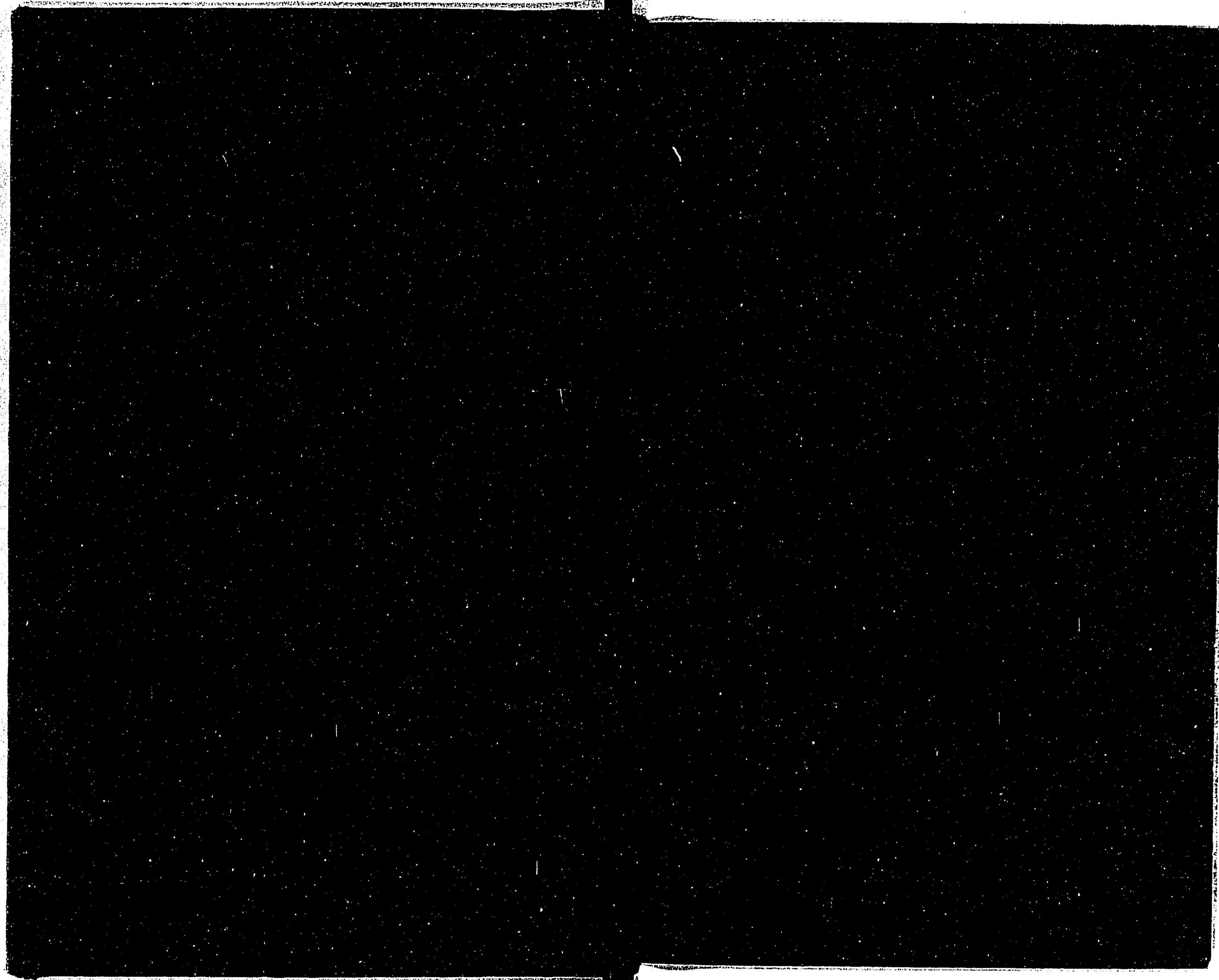
# 外交時報

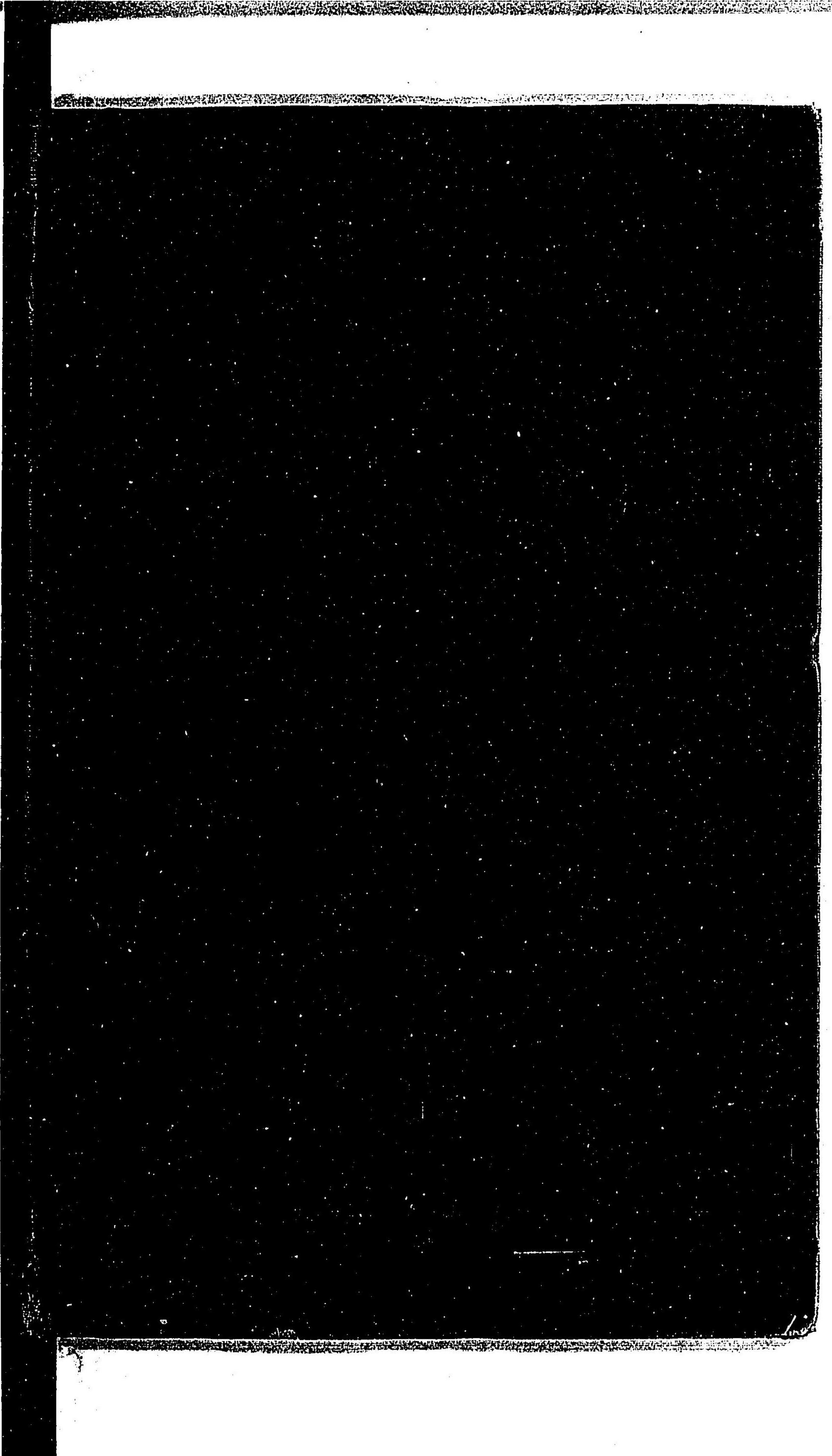
每月一回二十日發行

大賣場	雜書	外交	外交	萬國	公國	國際	論說	記傳	肖像	定價
本郷	芝	神田	神田	芝	神田	芝	神田	神田	神田	金一圓七角
丁西社	東京堂	有斐閣	有斐閣	芝	神田	芝	神田	神田	神田	郵金一圓七角
										郵金一圓七角
										郵金一圓七角

外交時報社

東京市牛込區早稻田東京專門學校出版部







088282-000-4

912.4-A242s

巢林子撰註

饗庭 篁村／著

M35

DBI-0115



